

受付番号

留学・研究計画書

氏名 西村 弘代	留学機関名 ウズベキスタン共和国科学アカデミー 芸術学研究所
留学先国名 ウズベキスタン共和国	留学期間 西暦 2011年4月～2013年3月
研究テーマ ソ連期を経たブハラにおけるイスラームの変容と都市構成原理の解明	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>中央アジアのウズベキスタン共和国の都市ブハラは、ザラフシャン川下流域に位置するオアシス都市であり、紀元前5世紀にはすでに市壁を持つ都市を形成していた。歴史的にはシルクロードの東西交易、遊牧民族による支配、ロシア帝国による支配を受けながらもオアシス都市国家としての独立性を保ち都市を持続させてきた。本研究では近年中央アジアが最も姿を変えたソ連前後の時期を主軸とし、この地域で最も重要な都市であるブハラの都市の構成原理を解明することを目的とする。</p> <p>ソビエト化する20世紀初頭まで、ブハラは長く中央アジアにおけるイスラーム信仰の中心であり、200を超えるモスク、100を超える学院(マドラサ)があった。またスーフィー教団、聖者信仰も非常に強く、この地で生まれた教団が東南アジアのイスラーム化をもたらしたとされている。一方、そのもとで遊牧民系のウズベク人、定住民系のタジク人に留まらず、人口の20%をユダヤ人が占めるなど多民族、多宗教の共存社会でもあった。</p> <p>しかし、共産主義の無宗教政策の時代を経たことでイスラームをはじめとする宗教に対する信仰の形は変化し、都市構成要員である住民の流出、流入が起きた。この背後には行政、政治的な意図も指摘される。そのもとで人々が都市・建築をどのように使いこなし適応してきたのかを、住民側からの都市への接続点として街区(マハッラ)制に着目し、都市の構成原理をマクロとミクロの両面の視点から分析する。</p> <p>日本ではこの地域における建築的研究はイスラームという大枠でしか語られてこなかった。世界的にはソ連時代の調査とフランスの調査があるが、両者とも建物の悉皆調査の域を出ず、建築物を実測すること、または分類することに終始してしまっている。都市的視点を持った包括的な継続的な研究はみられない。本研究は都市史の視点からこうした点をつなげていくことで、都市の構成原理およびその背景に迫ることを目的にしており、その点において建築・都市分野に新たな知見を提示できる。</p> <p>歴史的にも、都市・建築のソ連期の研究はマルクス主義的解釈に偏ったものが主であった。さらに20世紀初頭以降から現在のイスラーム復興に至る変化の過程について、精緻に研究されたものはない。ブハラの都市を題材に、ロシア、イスラーム、アジアとの関係を意識しながら、空白の約70年間を持つ中央アジアを研究することに本研究の学術的意義がある。</p> <p>さらにはソ連の崩壊により独立した中央アジア5カ国と日本との関係は、レアメタルや石油資源などで近年政治的・経済的にも強くなってきており、同じアジアとして日本に対する経済協力や技術的支援の期待も高まっている。アジアにおける日本のリーダーシップを発揮するためにも、この地域に関する文化的研究はその素地となるものである。</p> <p>ロシア、中国、イスラームだけでなく住民間においてはイスラエルとも強い関係を持っている地域の特性を明らかにする本研究は、真の国際相互理解の促進に対して大いに貢献することが期待される。</p>	